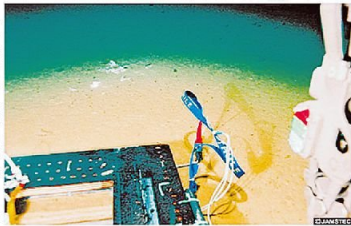


# 地球を守るために 身近なことから始めよう



岡山市・伊島小4年 **岡安 倫宏**

## プラごみ 深海1万メートルまで



レジ袋のような使い捨てプラスチック製品が水深1万メートルを超える場所にもまで到達するなど、プラスチックごみの汚染が深海に及んでいるとの調査結果を国連環境計画(UNEP)と日本の海洋研究開発機構のグループがまとめた。

UNEPは「貴重な深海の生態系に悪影響を与える懸念もある」と警告。各国に使い捨てプラスチック製品の生産や消費の削減を促すとともに、深海を含めた海のプラスチック

### 国連など調査 「生態系影響も」

海のプラスチックごみ、ペットボトルや包装材料、レジ袋といったプラスチック製品が投棄されることで最終的に海に到達して発生する。年間80万1千トンを超えるが、2050年には海にいる魚の数が多くなくなる試算もある。マカマや海鳥、クジラなどが餌と間違えての吞み込み、ごみに絡まって窒息死したりすることで生態系に影響が出る懸念されている。海を漂う間に壊れてできる直径5センチ以下のマイクロプラスチックの汚染も深刻で、環境中の有毒化学物質を吸着するため、のびのびした海鳥や魚などに化学物質が蓄積する危険性が指摘されている。

マリナ海溝の水深1万8000メートルの海底で、プラスチックごみ、中央付近の深海海溝研究開発機構提供

「ごみの監視体制を強化することを提案した。」

グループは、海洋機構の有人潜水調査船「しんかい6500」などの調査で映像や画像に写ったごみの情報をまとめたデータベースを利用した。1982〜2015年に深さ1000メートル以上の海で実施された5100回分の調査データを分析し、見つかったごみの数や種類などを集計した。

太平洋やインド洋などで30〜50個のごみが確認された。種類別ではプラスチックが全体の33%と最も多く、うち89%がペットボトルやレジ袋といった使い捨て製品だった。

プラスチックごみは、最も深いのは日本に近い太平洋・マリナ海溝の1万8000メートルの場所を確認され、北東部太平洋でも深さ4684メートルの深海で見つかった。深い部分ほど使い捨て製品の比率が高い傾向があり、軽いため海流などにによって長い距離を運ばれやすいのが要因と考えられた。

日本周辺の深海でプラスチックごみが多く見つかった海域は、生物多様性条約の枠組みなどで重要な生態系が存在する位置付けられた場所と重なる。深海ではレジ袋が生物に絡みつきたり、袋に生か物が付着したりしているも確認された。調査結果は海洋研究の専門誌に発表された。

2018年5月6日付 山陽新聞

## 寸評

深海にまで及んだプラスチックごみの汚染を伝える記事をきっかけに、世界の現状を熱心に調べています。その結果を踏まえた上で「ぼくらができること」を一生懸命に考察し、説得力ある言葉で訴えています。

深海一万メートルで、レジ袋のようなプラ製品が見つかった。こんな深い海の底にぼくらのゴミがあるなんて信じられなかった。今年の春、タイで死んだコビレゴンドウの体から重さ八キロのビニール袋などが見つかった。このクジラは、ゴミをえさと間違えて飲み込んでしまったのだ。このクジラはきつと苦しかったに違いない。ぼくは心がいたんだ。

今年の夏、海のゴミ問題を実感するために海岸清掃のボランティアに参加した。そこではペットボトルやビニール袋などがたくさん落ちていた。一体どこからゴミが海岸にたどり着くのか疑問に思った。調べてみると、海岸に

流れ着くほとんどのゴミは、陸上で捨てられ、雨や風により川に入り、海まで流されていることが多いと分かった。

多くのプラスチックは、石油から作られている。プラスチックボトルが自然界で分解されるまでには四百五十年、ビニール袋は十から二十年かかるそう。だから、生き物が間違えてビニールなどを飲み込んでしまうと分解されにくいプラ製品は体内に残ってしまうのだ。これ以上あのクジラのような生き物を増やさないために、ぼくらは捨てることをやめることだ。そして、川に流れるゴミを減らし、川をきれいにする

こと。川の環境を守ることは、海の環境だけでなく、そこにくらす生き物たちを守ることもつながるのだ。

今年、ある企業がプラ製ストローをやめ、紙製ストローを使用すると宣言した。それは地球環境全体から見ると小さな変化かもしれないが、生活の中にあふれるプラ製品に対する意識を大きく考え直すきっかけになった。ぼく自身も買い物に行く時はマイバッグを持ち、ペットボトルではなく水筒を持つようにした。小さなことでも身近なことから始めることが大切だ。そして、大切な地球を守るために自分だけでなく周りの人達とも協力してプラごみを減らしていくようにしていきたい。